

『普賢菩薩行願讚』について

藤谷厚生

本稿は、華嚴經の入法界品で、善財童子の悟りの完成のために普賢菩薩が説いたその行願(普賢行)の内容理解のための一研究ノートである。テキストとしては、不空三蔵訳(8c中頃)の『普賢菩薩行願讚』(大正蔵経第10巻880上段以下)の62頌を用い、足利惇氏先生の「普賢菩薩行願讚の梵本」(京都大学文学部研究紀要4号[1956年])や般若三蔵による同本異訳とされる華嚴經(四十巻)の「入不思議解脱境界普賢行願品」(以下、四十華嚴・普賢行願品と略)の普賢大願王清浄偈などを参照しながら、できるだけ原本の意に即すように書き下し、邦訳としてここに翻刻した。特に四十華嚴「普賢行願品」には、この普賢菩薩の十大行願については、「若欲成就此功德門。應修十種廣大行願。何等爲十。一者禮敬諸佛。二者稱讚如來。三者廣修供養。四者懺悔業障。五者隨喜功德。六者請轉法輪。七者請佛住世。八者常隨佛學。九者恒順衆生。十者普皆迴向」(大正蔵経第10巻844頁中段24行目)とあり、本稿では便宜上これに随い、本文の内容を「礼敬諸仏」「稱讚如來」「廣修供養」「懺悔業障」「隨喜功德」「請轉法輪」「請仏住世」「常隨仏學」「恒順衆生」「普皆迴向」の十種とそれに付随する小見出しを附して区分し、それぞれの本文書き下し訳に、語註や解説ノートを加えて要旨を述べ、末尾には四十華嚴「普賢行願品」の普賢大願王清浄偈を書き下し邦訳して参考として付した。

キーワード：普賢行、普賢行願讚、一塵法界觀、入法界

(凡例)

書き下し翻刻に際して、読みやすいように以下の点を試みた。

- 1、各偈(四句一頌)ごとに、文頭に番号を付した。
- 2、原文の旧漢字は、極力新字体に置き換え改めた。
- 3、重要と思われる語句の頭に*を付け、後にその語註を設けた。
- 4、梵本にある原語を示す場合は、その語前に(S)と付した。

[翻刻本文]

*普賢菩薩行願讚

*不空三蔵訳

(礼敬諸仏)

- (1) あらゆる十方世界中、一切三世の*人師子。我れいま彼を礼するに、^{らい}尽く余すこと無く、^{ことごと}みな清浄の身口意を以てす。(2) *身は刹土微塵数の如く、一切の如來を、我れ悉く礼せん。みな*心意を以て諸仏に対すに、此の普賢行願力を以てす。

[註記]

*普賢菩薩行願讚・・・タイトルは原本では(S) Bhadracaryā-praṇidhāna-gāthāh となっている。

通常、「普賢」は梵語 Samantabhadra であるが、ここでは Samanta が省略されて単に Bhadra として用いられている。このタイトルについての詳細は、前述の「普賢菩薩行願讚の梵本」（京都大学文学部研究紀要4号 [1956年]）に詳しいので参照。尚、この「普賢菩薩行願讚の梵本」は、南伝系とされる不空三蔵の漢訳に対応する慈雲尊者の梵本を底本とし、これに京都大学が所蔵する梵文三本を参考として、校訂された貴重な資料でもある。因みに、普賢の Samantabhadra の Samanta は、「すべての方面に、完全な」の意味であり、Bhadra は「優れている、良い」などの意味があり、「普く賢れる」と読み慣わされる。普賢菩薩とは、「あらゆる方面にすぐれた菩薩」という意味である。

- * 不空三蔵・・ [Amoghavajra : 705 ~ 774] 金剛智 [Vajrabodhi] の弟子。真言宗では付法八祖の第六祖とされる。741年、師の金剛智の遷化にともない南インドに渡り、後に金剛頂経などの密教経典を中国に将来し、756年以降は唐王朝の庇護を受けて、大興善寺に住して訳経に従事する。この『普賢菩薩行願讚』は、不空三蔵が南インドから持来したものとされ、756年以降に翻訳されたものと推測される。
- * 人師子・・ (S) Nara-siṃha、仏の徳号。仏が人間界で偉大なることを、百獣の王であるライオンに譬えて言う。
- * 身は刹土微塵数の如く・・ 原文には、“kṣetra-rajopama-kāya pramāṇaiḥ” 「自身を領土の微塵（粒子）の数のように無数に（現じること）によって」の意である。
- * 心意を以て・・ 心の中でイメージしての意。梵本原文には (S) Manena とあり、諸仏を心中で意識してイメージしながら礼拝することである。

[解説ノート]

この偈頌では、普賢菩薩が善財童子に仏の不思議解脱境界に入るための実践として、普賢の十大行願を説くのであるが、まず第一に礼仏から始められる。ここでは、十方三世の一切の如来をイメージして一度に礼拝するのである。特に、多身を以て多仏を礼する華嚴独自の無尽礼が説かれている点は重要であろう。勿論、一切三世の仏の前に自身を無数に現じて、同利那に礼拝するのは、観想として行われるものであり、この普賢行願そのものが、実は入法界のための実践観行となっている。

[本文] (称讚如来)

- (3) *一塵端に於て*如塵の仏、諸仏、仏子其の中に坐したまう。是の如き法界、尽く余すこと無し。我れ信ず、諸仏悉く充滿したまうと。(4) 彼の無尽功德海に於て、諸の音声功德海を以て、如来の功德を*闡揚せん時、我れ常に諸の*善逝を讚歎せん。

[註記]

- * 一塵端・・ (S) Eka-rajās、一つの微細な塵（粒子）の中への意。
- * 如塵の仏、諸仏・・ (S) Rajopama-buddha、塵のような微細な仏や諸仏の意。
- * 闡揚・・ 明らかにすること。 *善逝・・ (S) Sugata、如来の十号の一つ。彼岸に逝って、生死の苦海に退転しない者の意。

[ノート]

称讃とは、称とは称揚、讃とは讃歎であり、ほめたたえることである。ここでは一切の如来の徳を誉めたたえる実践が説かれる。特に重要なのは、いわゆる一塵法界観である。これは微細な一つの塵（粒子）のようなものの中にも、無数の諸仏や菩薩が内在しており、それが大宇宙に遍満していると見る華嚴特有の法界観である。このように、宇宙に遍満する無数の仏を觀想し、礼拝、称讃するところに、入法界の実践としての普賢行の特徴がある。

[本文] (広修供養)

(5) *勝華鬘しやうけまん及び塗香ぬかを以てし、及び*伎樂ぎがく、*勝傘蓋しやうさんがいを以てせん。一切の嚴具ごんぐ、みな殊勝しゆしやうならん。我れ悉く諸ことごとの如来を供養せん。(6) 勝衣服しやうえふく及び諸香しやくじゆ、末香しゆみ積聚して須弥しゆみの如し、殊勝の燈明及び焼香を以て、我れ悉く諸ことごとの如来を供養せん。(7) あらゆる無上廣大の供、我れ悉く諸ことごとの如来を*勝解しやうげせん。普賢行の勝解力を以て、我れ諸の如来を礼し供養せん。

[註記]

- *勝華鬘・・・すぐれた華鬘（花かざり）。
- *伎樂・・・仏を讚美するために音楽や踊りを奉納すること。
- *勝傘蓋・・・すぐれた傘や覆い。天蓋。 *勝解・・・殊勝に了解すること。

[ノート]

広修供養とは、香華燈明等の種々の供物を具えて、広大に諸仏を供養することである。特にここでは、大変優れた華鬘、音楽、天蓋、衣、お香、燈明などの六種の供具を、諸如来に対して供養をしているのである。

[本文] (懺悔業障)

(8) 我れ曾て作す所の衆の罪業は、みな*貪欲、瞋恚、痴よに由る。身口意に由るもまた是かくの如ごとし。我れみな一切を*陳説じんぜつす。

[註記]

- *貪欲、瞋恚、痴・・・貪欲（むさぼり）、瞋恚（いかり）、愚痴（おろかさ）の三毒。我々には、三毒などの煩惱があるので罪業を造ってしまうのである。
- *陳説・・・(S) Pratideśayamī、罪を告白し懺悔すること。

[ノート]

次に懺悔業障であるが、懺悔さんげの懺とは、梵語 Kṣama の音写を略したもので、悔過とも訳される。意味は自らの過ちを悔いることである。この一頌は、四十華嚴に於いては「我昔所造諸惡業 皆由無始貪恚癡 從身語意之所生 一切我今皆懺悔」と漢訳されている「懺悔文」であり、大乘諸宗で今日でも勤行されている有名な偈頌である。我々は、悪業によって生死輪廻し、苦界に展転し解脱できないのであるが、懺悔することで迷いの原因である業障を滅除することができる。ただここで重要なのは、礼拝して懺悔告白する対象が単なる一尊の仏ではなく、三世一切の諸仏に対して懺悔告白すると言う点である。三世一切の諸仏に対して、懺悔礼拝することによって、自らの業障の消除、浄化が可能になるのである。そういった意味では、先に

述べた三世一切の諸仏が宇宙に遍満すると見る、普賢行の一塵法界観が不可欠であり、懺悔の実践の根底にあると言えよう。この懺悔業障の実践は、大乘仏教の重要な特徴でもある。

[本文] (随喜功德)

(9) あらゆる十方の*群生の*福、有学、無学、辟支仏及び諸仏子、諸如来、我れみな咸く一切を*随喜せん。

[註記]

- *群生・・(S) Jagasya、生き物、動物。ここでは衆生に同じ。
- *福、有学、無学、辟支仏・・福とは福德のある者のこと。有学は修行中の声聞、菩薩。無学は学ぶべきことのない阿羅漢。辟支仏は独自で悟りを開いた縁覚の仏。
- *随喜・・他の修善(善根功德)するものを見て喜ぶこと。

[ノート]

ここでは如来の善(善根功德)に対してのみではなく、十方世界の声聞、縁覚、菩薩、その他、一切衆生のすべての善根功德に対して随喜する訳である。これは四無量心の喜無量心を修する功德と同じで、「是の喜、心と相應して、瞋無く、恨無く、怨無く、惱無く、善く修して解を得れば、廣大無量にして十方に遍満す。是を喜無量心と爲す也。」(『法界次第初門』智顛撰・大正藏経第46巻672頁中段)とあるように、一切の善根を随喜することで、自らの心を浄化し、煩惱を滅除する効果があるのである。

[本文] (請転法輪)

(10) あらゆる十方の*世間燈、證菩提を以て、*無染を得たまえり。我れいま*勸請す諸の世尊、無上の*妙法輪を転じたまえ。

[註記]

- *世間燈・・仏陀はあまねく世間を照らし、衆生を苦悩から救うので、燈明に喩えて言う。
- *無染・・煩惱のない悟りの境地のこと。染とは、執着の妄念、煩惱のこと。
- *勸請・・誠実をもって仏の説法や住世を請い求めること。
- *妙法輪を転じ・・非常に優れた真理の法を説き示すこと。

[ノート]

ここでは、十方の仏に対して、法輪を転ずることを要請するのである。法輪とは、小乗では四諦、十二因縁などの法、大乘では六波羅蜜、十波羅蜜などの法門を指すのであるが、諸仏が自らの機根に対応するよう、説法教化することを祈るのである。

[本文] (請仏住世)

(11) あらゆる*涅槃を現ぜんと欲したまえる者、我れみな彼に於て合掌して請す。惟だ願くは、諸の群生の利安樂の為に、*刹塵劫に久住したまえ。

[註記]

- *涅槃を現ぜんと欲したまえる者・・悟りを完成し、將に涅槃に至らんと望んでいるところの

仏のこと。

- * 刹塵劫・原文には ‘kṣetra-rajopama-kalpa’ 「国土に遍満する微塵の数のような無数の劫」とあり、その世界にある一切の衆生が成仏するまでの大変長い時間をさす。

[ノート]

仏は機縁を感じずる者があれば、その場所に出現して法を説き、機縁ある者が尽きてしまえば、涅槃に入って寂滅する。ここでは、一切衆生の利安樂のために、救済教化の助力を祈り、諸仏が涅槃に入らずに、この世にとどまることを請い願うのである。

[本文] (総標廻向)

- (12) 禮拜、供養及び*陳罪^{じんざい}、隨喜、功德及び勸請。我が*積集^{しやくじゆう}する所の諸の功德^{ことごと}、悉くみな菩提に*廻向せん。

[註記]

- * 陳罪・懺悔のこと。前掲(8)註「陳説」を参照。
- * 積集・自らが修行実践して積むこと。
- * 廻向・(S) Nāmayamī [√ nam]、転じて向け、それらの功德を捧げること。

[ノート]

礼敬諸仏から請仏住世までの七行願は、諸仏を対象として行われる儀礼的实践であり、それらによって得られた功德を、ここで一端取りまとめて、総じて自らの菩提の完成へと向けるのである。廻向とは、一般に梵語 Parīṇāmanā の訳とされるが、本来は転向する、どこかに向けるの意味である。善業による業果としての功德を何かに転向するという廻向の思想は、大乘仏教の大きな特徴でもある。

[本文] (常随仏学)

- (13) 諸の如来に於て我れ修学^{しゆがく}せん。普賢行願を円満せん時、願くは我れ供養せん。過去仏とあらゆる*現住十方世と。(14) *あらゆる未来^{すみやか}に。速に願い成ぜん。意願円満にして菩提を證し、あらゆる十方^{せつど}の諸刹土、願くはみな広大にして咸く清浄ならん。

[註記]

- * 現住十方世・現在十方の世界に存する諸仏の意。
- * あらゆる未来・あらゆる未来の諸仏に対しての意。弥勒などの未来に成仏するとされる補処の仏などを指す。

[ノート]

ここからの常随仏学、恒順衆生、普皆廻向の三行願では、主に自らが行うべき修学実践について述べられる。ここでは過去、現在、未来の三世に渡って十方に存在する諸仏に対して供養を行い、それらの諸仏に常に随い修学する旨の宣言がなされる。大乘仏教では、しばしば釈迦一仏に随学するのではなく、諸仏に随学することが説かれるが、ここでは一切の諸仏に随学することが説かれる。

【本文】(恒順衆生)

(15) 諸仏、咸く*覺樹王に詣り、諸の仏子等みな充滿せん。あらゆる十方の諸衆生、願くはみな安樂にして、*衆患無からん。(16) 一切群生は法利を獲て、願うて*隨順の如意心得ん。我れまさに菩提の修行の時に當って、*諸趣の中に於て宿命を憶せん。

【註記】

- *覺樹王・・(S) Bodhi-drumendra、菩提樹王とも。菩提樹を諸樹木の王に譬えてよぶ。
- *衆患・・すべての苦悩、煩惱による苦しみ。
- *隨順の如意心・・衆生に隨順して悟りを成就する心。
- *諸趣・・諸の赴いた處。輪廻轉生して生まれ至る諸の世界。

【ノート】

恒順衆生とは、あらゆる衆生の種類や機根に随って、その衆生を饒益する利他行をさす。仏は必ず菩提樹下で成道し、説法して衆生を教化し救済する。ここでは慈悲心により、あらゆる衆生を救済する利他行を、そのまま自身の菩提への修行となさんと誓願を立て、深く宿命として、自らの心に記憶することが述べられる。

【本文】(普皆廻向)

(17) 若し*諸生の中に生滅を為さば、我れみな常に出家と為るべし。*戒行無垢、恒に清淨にして、*常行無欠、*孔隙無からん。(18) *天語、龍語、夜叉の語、鳩槃荼の語、及び人語、あらゆる一切群生の語、みな諸音を以て而も説法せん。(19) *妙波羅蜜を常に加行し、菩提に於て心迷いを生ぜず。あらゆる衆罪および障礙、悉くみな滅尽して、余り有ること無し。(20) 業煩惱及び魔境に於て、世間道中に解脱を得て、猶お蓮華の水に著せざるが如く、また日月の空に著せざるが如し。(21) 諸悪趣の苦、願くは*寂靜し、一切の群生をして安樂ならしめ、諸の群生に於て、利益を行じ、乃し十方の諸刹土に至らん。(22) 常に行ずるに諸衆生に隨順し、菩提の妙行を円満ならしめ、普賢の行願を我れ修習して、我れ未來劫に於て修行せん。(23) あらゆる我れと共に同行せん者、彼と共に常に咸く*聚會することを得て、身口業及び意業に於て、同一行願にして修習せん。(24) あらゆる善友の我れを益する者、我が為に普賢行を示現して、彼と共に常に得て聚會し、彼に於てみな*無厭心を得ん。(25) 常に面に諸の如来に見ることを得て、諸の仏子と共に*圍繞し、彼において広供養を興し、みな未來劫において倦むこと無からん。(26) 常に諸仏微妙の法を持し、みな菩提行を*光顯せしめん。咸くみな普賢行を清淨にし、みな未來劫に於て修行せん。(27) 諸有の中に於て流轉せん時、福德智慧無尽なるを得て、般若方便解脱、無尽功德藏を獲得せん。(28) 一塵端に如塵の刹土あるが如く、彼の中の*仏刹、不思議なり。仏及び仏子、其の中に坐したまう。常に菩提勝妙行を見ん。(29) 是の如き無量一切の方に、*一毛端に於て三世の量あり。*仏海及び刹土海と、我れ修行するに諸劫海に入らん。(30) 一音声功德海に於て、一切如来清淨の聲あり、一切群生の*意樂の音、常にみな仏弁才に入ることを得ん。(31) 彼の無尽の音声の中に、一切三世の諸如来、すなわち*理趣妙輪を轉ずる時に當て、我が慧力を以て普く能く入らん。(32)

一刹那、諸の未来なるを以て、我れ未来の一切劫に入らん。三世所有の無量劫、*刹那に能く俱胝劫に入らん。(33) あらゆる三世の大師子に、一刹那を以て我れ咸く見えん。彼の境界に常に入ることを得て、幻の如き解脱と行威力あり。(34) あらゆる三世の*妙嚴刹、能く一塵端に現出生せん。是の如く無尽の諸方所にあり。能く諸仏の嚴刹土に入らん。(35) あらゆる未来の世間燈、彼れみな覚悟して法輪を転じ、涅槃の究竟寂を示現したまう。我れみな世尊に往詣せん。(36) 神足力を以て普く迅疾とし、乘威力を以て普く遍門とし、行威力を以て等しき功德とし、慈威力を以て普く遍行とし、(37) 福威力を以て普く端嚴とし、智威力を以て無著の行とし、般若方便等持力、菩提威力もみな積集せん。(38) みな業力に於て而も清浄にして、我れいま煩惱力を摧滅し、悉く能く*魔羅力を降伏して、普賢一切力を円満せん。(39) 普く刹土海を清浄ならしめ、普く能く衆生海を解脱し、悉く能く諸の法海を觀察し、及び智海を源を得ん。(40) 普く行海咸く清浄ならしめ、また願海咸く円満ならしめ、諸仏の海会咸く供養し、*普賢行劫疲倦無からん。(41) あらゆる三世の諸如来、菩提の行願、衆の差別、願くは我れ円満して、悉く余すこと無く、普賢行を以て菩提を悟らん。(42) 諸仏如来、長子有り。彼の名号を、普賢尊と曰う。みな彼の慧同妙行を以て、一切の諸善根を廻向す。(43) 身口意の業、願くは清浄に、諸行清浄にして刹土も浄く、彼の智慧、普賢の名の如く、願くは我れ今より尽く彼と同一にせん。(44) 普賢の行願、普く端嚴し、我れ*曼殊室利の行を行じ、諸の未来劫に於て倦むこと無く、一切円満作して余り無からん。(45) 修する所の勝行、能く量ること無く、あらゆる功德、量るべからず。無量の修行而も住し已て、尽く一切の彼の神通を知らん。

[註記]

- * 諸生の中に生滅を・・諸の世界に輪廻して生死を繰り返すこと。
- * 戒行無垢・・戒律を遵守して、心に穢れがないこと。
- * 常行無欠・・常に菩薩行を實踐して、欠落しないこと。
- * 孔隙・・すきま。間断がないこと。
- * 天語、龍語、夜叉の語、鳩槃荼の語・・天語は天部の言葉、龍語は龍族の言葉、夜叉 (S) Yakṣa と鳩槃荼 (S) Kumbhāṇḍa は、それぞれ悪鬼の一種。ここでは、人以外の衆生の言葉も理解して、それぞれの言葉で説法し、衆生を救済することを示している。
- * 妙波羅蜜・・大乘の優れた六波羅蜜などの波羅蜜行。
- * 寂靜・・(S) Praśamanto [√ pra-sam]、消滅して静穩になること。
- * 聚會・・(S) Samāgamu、出会うこと。一緒に集まること。
- * 無厭心・・(S) Virāgaya、欲から離れた、煩惱から離れた (心)。
- * 圍繞・・まわりを取り囲むこと。回りを繞らすこと。
- * 光顯・・(S) Paridīpaya、光照らし出すこと。顕著に示すこと。
- * 仏刹・・仏の国土。刹は (S) Kṣetra の音写で、国土、領土の意。
- * 一毛端において三世の量・・原文には “vāla-patheṣu triyadhva-pramāṇām” とあり、「微細な毛筋ほど (の幅) の粒子に、三世の量が (内在して) ある」の意である。(S) Vāla-patha

は、「一毛端」と訳されているが、ここでは前文にあるように一塵端の粒子に無数の仏の国が内在しているように、一毛端の粒子に同時に三世の量が含有されていることを表現しているのである。

- * 仏海・・(S) Buddha-samudra、梵語 Samudra は、大海の意であるが、ここでは仏の満ちあふれた世界を海で譬えている。
- * 意楽の音・・(S) Aśaya-ghoṣam、(衆生の)願望の声、音声。
- * 理趣妙輪を転ずる・・(S) Cakra-nayaṃ、法輪(真理)としての理論(教義)を説くこと。
- * 刹那に能く俱胝劫に入らん・・ここは、原文には“kṣaṇa-koṭi-praviṣṭa careyaṃ”とあり、「瞬時にして(菩提の)極致に証入することを修する」の意であり、「俱胝劫」の「劫」は前句の‘kalpa-triyadhva-pramāṇās’ (三世に渡る無量の長さの劫[時間])を受けて、本来はそれだけの時間がかかるが、これを一瞬にして成し遂げる意を強調するために、ここでは敢えて「劫」という語を付け加えて、「俱胝劫」と漢訳していると考える。
- * 妙巖利・・(S) Sukṣetra-viyūhās、非常に立派な莊嚴された土地(国)の意。
- * 魔羅力・・(S) Māra-balaṃ、(正道を遮る)悪魔の力のこと。
- * 普賢行劫疲倦無からん・・ここでの「疲倦無からん」とは(S) Akhinna、つまり疲れて嫌になったりしないという意であり、普賢行を完成するには、とても長い時間がかかる訳であるが、その修行の間にも決して退転することなく、精進することを誓願しているのである。
- * 曼殊室利之行・・原文には“mañjuśrī-praṇidhāna careyaṃ”とあり、「文殊師利の誓願を修行して」の意である。この普賢行願讃の異訳として仏陀跋陀羅(Buddhabhadra: 418年頃)訳の『文殊師利發願經』がある。これは、44頌からなる讃歌(Stotra)であるが、この経題が示すように、普賢行は元は文殊菩薩の發願(行)であったと言える。

[ノート]

ここからの頌偈は普皆廻向となるが、ここでは普賢行である既に述べられた九大願の修行の功德を、更なる普賢行の完成へと廻向することが説かれる。順にその特徴を挙げるならば、「①輪廻転生を繰り返す中で、常に出家者として修行をする。②衆生を救済するに、人間以外の様々な種類の衆生の言語を理解し、その類の言葉で説法する。③六波羅蜜などの菩薩行を修し、煩惱を減尽するように精進して、空の境地に住する。④一切の衆生を救済するよう、十方の世界に至り衆生に随順し、未来劫を尽くして普賢行を修行する。⑤同じく普賢行を志す者と集会して、行願を遂行する。⑥諸如来に見え、供養して退転なく普賢行を行う。⑦十方に微塵の如く在る三世の如来の説法を、自らの智慧の力で理解する。⑧一刹那において、三世の諸仏が完成する菩提の境地に証入する。⑨三世の諸仏が内在する微塵(粒子)のような世界に入り、諸仏のもとに詣でる。⑩神足力、乗威力、行威力、慈威力、福威力、智威力、智慧や方便力、菩提などの様々な威力が蓄積され、自らの煩惱力や魔羅力を克服して、普賢行の一切の力を成就円満する。⑪衆生の世界を抜け出て、智慧を完成させ、普賢行を成し遂げて菩提を成就する。」など様々な願望、誓願がここでは述べられている。

[本文] (顯示功德)

(46) 乃至、虚空に*究竟を得ば、衆生余すこと無く、究竟して然らん。及び業煩惱、乃ち^つ尽くるに至らば、乃至我が願いもまたみな^つ尽きなん。(47) 若し十方無辺の*刹^{くに}有りて、宝莊嚴を以て諸仏に施し、天妙人民勝安樂にして、如刹微塵劫に*捨施せん。(48) 若し人、此の勝願王に於て、一たび^よ聞いて能く勝解心を生じ、勝菩提に於て渴仰を求めば、殊勝なる*前^{まへ}の福聚を獲得せん。(49) 彼れ諸の悪趣を遠離することを^よ得て、彼れみな諸の悪友を遠離して、速疾に無量寿に見ることを^よ得て、唯だ普賢の勝願行を憶せん。(50) 大利益の勝寿命を得て、善來たりて此の人の生命と為らん。彼の普賢大菩薩の如く、彼の人、久しからずして当に獲得すべし。(51) 所作の罪業の*五無間と、智慧無きに由って作す所は、彼れ普賢行願を誦する時、速疾に銷滅して余り無きを得ん。(52) 智慧、容色、及び相好、族姓、品類成就を得て、魔外道に於て*難摧を得て、常に三界に於て供養を得ん。(53) 速疾に菩提樹に往詣して、彼の坐に到り已て有情を利せん。菩提を覚悟して法輪を^{なら}転じ、魔羅併びに*^{えいじゆ}宮徒を摧伏せん。(54) 若し此の普賢願を持し、誦誦し受持し、及び演説すること有らば、*如来具知して果報を得て、勝菩提を得んこと疑いを生ずる勿れ。

[註記]

- * 究竟・・(S) Niṣṭha、～の位に至る、状態になること。 * 刹・・(S) Kṣetra、国土。
- * 捨施・・(S) Dādeyam (√ da)、与える、施すこと。
- * 前の福聚・・ 前述したところの普賢行を修して得られる福果や功德。
- * 五無間・・ 五無間罪。無間地獄に墮ちる因になる五逆罪のこと。
- * 難摧・・(S) Adhr̥ṣyaḥ、そういう状態を見ないこと。災難に遭わないの意。
- * 宮徒を摧伏・・(悪魔の) 軍隊を打ち破ること。
- * 如来具知して・・ 諸如来がともに了知して。

[ノート]

ここでの一段は、普賢行を修行実践することによって得られる功德が説かれる。冒頭には、菩薩の行願は究竟に至り、自らの煩惱すべてが滅尽し、衆生が尽きてしまえば、その行願も終わる旨が述べられ、救済する対象の衆生がいなくなるまで普賢行が続けられることが述べられている。ここでの功德を簡潔にまとめると、「①もし人がこの普賢行願讚を一度でも聞き、これを理解して涅槃を求める心が生ずるならば、とても優れた功德を得る。②悪友から離れ、無量寿如来に見えることができ、普賢行願を確実に心に憶念することができる。③功德として善業の報いが訪れ、寿命が伸びる。④普賢行願を誦誦することで、五逆罪や無明によって為した罪業が消滅する。⑤自らの智慧、身体的な容貌、門地などが良くなり、災難や不幸に遭うことがなく、周りから供養を受けることができる。⑥菩提樹の宝坐に座り、悟りを得て、説法するなど衆生を救済して、悪魔を打ち破る。⑦普賢行願を受持し、誦誦し、他者に演説すれば、すぐれた菩提としての果報を得る。」などが挙げられている。

[本文] (結歸廻向)

(55) *妙吉祥の勇猛智ゆみようの如く、また普賢にも是の如きの智しゆうがくあり。我れ当に彼れを習学せん時、一切の善根ことごと悉く廻向せん。(56) 一切三世の諸如来、此れを以て殊勝願に廻向す。我れみな一切の諸善根ことごと、悉く以て*普賢行に廻向せん。

[註記]

* 妙吉祥の勇猛智・・「妙吉祥」とは文殊のこと。(S) Mañjuśīrī [文殊] の Mañju は「妙なる、美しい」の意、Śīrī (= Śrī) は「吉祥、幸運」の意。文殊菩薩が修行によって得た勇ましい智慧をさす。

* 普賢行に廻向・・(積んだ功德を) 普賢行の完成に廻し向けること。

[ノート]

ここでは、文殊菩薩が菩薩行を修して智慧を完成させたように、また普賢菩薩がこの普賢行を行って智慧を完成させたように、自身も菩薩の修行を行って得た功德を、普賢行の完成に廻し向ける旨が述べられる。

[本文] (願生浄土)

(57) 当に*臨終捨寿りんじゆうしやじゆの時に於て、一切の*業障ごつしようみな転ずることを得て、親観まのあたりに無量光まみに見ゆることを得て、速かに彼の刹く、極楽界に往かん。(58) 彼かれに到ることを得て、此の勝願ことごと、悉くみな現前に具足を得ん。我れ当に円満してみな余すこと無く、衆生を世間に利益せん。(59) 彼の仏会はなは、甚だ端嚴しんたいなるに於て、*殊勝なる蓮華の中に生じて、彼れに於て獲得おわつして*記別を受け、無量光如来に親対へんげせん。(60) 彼において獲得して記を受け已て、變化くわていせんこと俱胝無量種なり。広く有情に諸の利樂を作し、十方世界にも慧力を以てせん。

[註記]

* 臨終捨寿の時・・寿命が尽きて、臨終を迎える時。

* 業障みな転ずる・・(S) Āvaraṇān [業障] は、智慧を覆う障害を意味し、ここでは仏の智慧の障害がみな取り除かれての意となる。

* 殊勝なる蓮華の中に生じて・・非常に美しい蓮華の中に生まれての意。極楽に往生するものはみな蓮華の中に託生する。蓮華化生のこと。阿弥陀経など参照。

* 記別を受け・・(S) Vyākaraṇam は記別、授記のことであり、ここでは無量光如来から必ず成仏するという授記を受得するとの意。

[ノート]

ここでは、普賢行を修した者が臨終後の次生には、無量光(阿弥陀)如来の浄土に往生するという願いが述べられる。またその目的は、無量寿如来から直接に授記を得るためである。授記の思想は、法華経、無量寿経などの大乘経典に見られる大乘仏教特有の思想であるが、華嚴経の最終部に属する本讃には、願生浄土、授記獲得といった浄土思想の影響が強くみられる。既に仏陀跋陀羅訳の『文殊師利発願経』(4c 末訳)にも、「彼の仏国に生じ已て、諸大願を成満し、阿弥陀如来は、現前に我れに記を授けん」(大正蔵経第10巻879頁下段22行目)とあるから、本経偈頌の成立を考える上では、浄土思想との関連は重要であると言える。

【本文】（結勸受持）

(61) 若し人、普賢願を誦持せば、あらゆる善根じゆじ而も積集しか しゃくじゆうして、一刹那を以て*如願を得、此を以て群生、勝願を獲ん。(62) 我れ此の普賢行を獲得して、殊勝無量の*福德聚をもて、あらゆる群生、*悪習おほに溺るるも、みな*無量光仏みや ゆの宮に往かん。

【註記】

- * 如願を得・・・(S) Samṛdhyatu (√ sam-ṛdh) 成就、完成するの意。
- * 福德聚・・・(S) Puṇyam anantam、無量の幸福、際限ないほどの吉祥の意。
- * 悪習に溺るるも・・・(S) Vyasaṅgha-nimagnam、災難、不幸の悪循環に溺れている者。
- * 無量光仏の宮に往かん・・・(S) Amitābha-purim、阿弥陀仏の居る宮城、つまり極楽に往生するの意。

【ノート】

ここで、この普賢行願を誦持することにより、その願いが成就し、衆生にもその功德が及ぶことが説かれ、さらに悪趣に沈む衆生も、普賢行の善根功德により、極楽へ赴くことが説かれる。このように、巻末ではこの普賢行願の読誦と受持による功德が讃えられ、衆生の極楽往生への祈願をして、この讚は終えられる。

尚、この不空三蔵訳『普賢菩薩行願讚』と般若三蔵訳『普賢広大願王清浄偈』の62頌の内容を対照すると、『普賢菩薩行願讚』の第55頌から第60頌までの6頌が、『普賢広大願王清浄偈』での第46頌から第51頌までの6頌に対応しており、互いの梵本テキストの偈頌の順序（内容）に、若干前後の相違が見られる。

【参考文献】

- * 「普賢菩薩行願讚の梵本」足利惇氏（京都大学文学部研究紀要4号〔1956年〕所収）
- * 「善財童子の遍歴——入法界品の思想」長谷岡一也（『華嚴思想』講座大乘仏教3・春秋社〔1983年〕所収）
- * 「梵文普賢行願讚」泉芳璟（大谷学報10巻2号〔1929年〕所収）
- * 『普賢菩薩行願讚』不空三蔵訳（大正新脩大蔵経第10巻880上段以下）
- * 『文殊師利発願経』仏陀跋陀羅訳（大正新脩大蔵経第10巻878下段以下）

【付録】 以下に参考として、般若三蔵訳（798年）の四十華嚴の「普賢菩薩行願品」（大正蔵経第10巻847頁上段以下）に説かれた六十二の偈頌の書き下しを行い、邦訳として付す。

普賢広大願王清浄偈

般若三蔵訳

【翻刻本文】

(1) あらゆる十方世界中、三世一切の人師子。我れ、清浄なる身語意を以て、一切遍く礼して、ことごと尽く余すこと無からん。(2) 普賢行願の威神力、普く一切如来の前に現じ、一身にまた利

塵の身を現じて、一々に遍く刹塵の仏を礼したてまつる。(3) 一塵の中に塵数の仏ましまして、
 各^{おのおの}菩薩衆会の中に処したまう。無尽の法界、塵にしてまた然り。深く信ず、諸仏みな充滿し
 たまうと。(4) 各^{おのおの}一切^{おんじょう}の音声海を以て、普く無尽の妙言詞を出して、未来一切劫を尽くして、
 仏の甚深功德海を讚ぜん。(5) 諸の最勝の妙華鬘、妓樂、塗香、及び傘蓋を以て、是の如き最
 勝の莊嚴具、我れ以て諸の如来を供養せん。(6) 最勝の衣服、最勝の香、末香、焼香と燈燭と、
 一々みな妙高聚の如し、我れ悉く諸の如来に供養せん。(7) 我れ、広大なる勝^{しやうげ}解心を以て、深
 く一切三世の仏を信じ、悉く普賢行願力を以て、普^{あまね}遍く諸の如来を供養せん。(8) 我が昔より
 造る所の諸の悪業は、みな無始よりの貪、瞋、痴に由る。身語意に従り生ずる所なり。一切を
 我れ今みな懺^{さんげ}悔す。(9) 十方の一切の諸衆生、二乗の有学及び無学、一切如来と菩薩のあらゆる
 功德を、みな随喜せん。(10) 十方のあらゆる世^{せけんとう}間燈、最初に菩提を成就せる者、我れいま
 一切をみな勸請したてまつる。無上の妙法輪を転じたまえ。(11) 諸仏、若し涅槃^{ねはん}を示さんと
 欲したまえば、我れ悉く至誠にして勸請せん。唯だ願くは、刹塵劫に久住して、一切諸の衆生
 を利樂したまえ。(12) あらゆる礼讚、供養の福、請仏住世、転法輪、隨喜、懺悔、諸善根を、
 衆生及び仏道に廻向せん。(13) 我れ一切の如来に随いて学び、普賢の円満行を修習して、過
 去の諸如来、及び現在の十方仏と、(14) 未来の一切の天人師^{てんじん}とに、供養したてまつらん。一
 切の意樂、みな円満にして、我れ願くは普く三世に随いて学び、速^{すみやか}に大菩提を成就することを
 得ん。(15) あらゆる十方一切の刹^{しやく}、廣大清浄にして妙莊嚴なり。衆会、諸如来を圍繞して、悉
 く菩提樹王の下に在り。(16) 十方のあらゆる諸の衆生、願くは憂患を離れ常に安樂ならん。甚
 深の正法の利を獲得して、煩惱を滅除して尽く余すことなからん。(17) 我れ菩提の為に修行
 をせん時、一切趣中に宿命を成じ、常に出家を得て淨戒を修し、垢無く破無く、穿^{せん}漏無からん。
 (18) 天、龍、夜叉、鳩槃荼、乃至人と非人等と、あらゆる一切衆生の語、悉く諸音^{しよとん}を以て而
 も説法せん。(19) 清浄なる波羅蜜を勤修して、恒に菩提心を忘失せず。障垢を滅除して、余
 り有ること無く、一切の妙行みな成就せん。(20) 諸惑業及び魔境より、世間道中に解脱を得
 て、猶お蓮華の水に著^{じやく}せざるが如く、また日月の空に住せざるが如し。(21) 悉く一切の悪道
 の苦を除き、等しく一切の群生に樂を与え、是の如く刹塵劫を経て、十方を利益して恒^{とこ}しえに
 尽くすること無からん。(22) 我れ常に諸の衆生に随順し、未来の一切劫を尽くして、恒に普賢
 廣大の行を修して、無上の大菩提を円満ならしめん。(23) あらゆる我れと同行せん者、一切
 処に於て同じく集^{しゆうえ}会し、身口意の業みな同等にして、一切の行願を同じく修学せん。(24) あ
 らゆる我れを益せん善知識、我が為に普賢行を顕示して、常に願くは我れと同じく集^{いによ}会して、
 我れに於いて常に歡喜心を生ぜん。(25) 願くは、常に諸の如来に面見し、及び諸仏子衆と圍繞
 して、彼に於いて廣大の供を興し、未来劫を尽くして疲厭^{ひえん}無からん。(26) 願くは諸仏微妙の
 法を持し、一切の菩提の行を光顯^{こうけん}せしめ、清浄なる普賢道を究竟して、未来劫を尽くして常に
 修習せん。(27) 我れ一切の諸有の中に、修する所の福智は恒しえに尽くすること無く、定慧方
 便及び解脱、諸の無尽功德蔵を獲ん。(28) 一塵中に塵数の刹有り、一一の刹に難思の仏有り、
 一一の仏は衆会の中に処して、我れ恒に菩提行を演ずるを見ん。(29) 普く尽十方に諸刹の海
 あって、一一の毛端に三世の海あり。仏海及び国土海と、我れ遍く修行して劫海を経ん。(30)
 一切如来の語清浄にして、一言に衆の音声海を具し、諸衆生の意樂の音^{こゑ}に随い、一一に仏弁才

の海に流る。(31)三世一切の諸如来、彼の無尽の語言海に於いて、恒に理趣妙法輪を転じ、我れ深く智力もて普く能く入らん。(32)我れ能く深く未来に入りて、一切劫を尽くして一念と為し、三世のあらゆる一切劫を、一念際と為して我れみな入らん。(33)我れ一念に於いて、三世あらゆる一切の人師子に見え、また常に仏の境界の中に入りて、幻の如き解脱と及び威力あり。(34)一毛端の極微の中に、三世の莊嚴刹を出現せん。十方の塵刹は諸毛端にあって、我れみな深く入りて而も嚴浄なり。(35)あらゆる未来の照世燈、成道して法を転じて群有を悟らしめ、仏事を究竟して涅槃を示したまう。我れみな往詣して親近せん。(36)速疾に周遍する神通力、普門に遍入する大乘力、智行普く修する功德力、威神普く覆う大慈力、(37)遍く浄莊嚴なる勝福力、無著にして無依なる智慧力、定慧方便なる諸威力、普く能く積集せる菩提力あり。(38)一切を清浄にせる善業力にして、一切の煩惱力を摧滅し、一切の諸魔力を降伏して、普賢の諸行力を円満せん。(39)普く能く諸刹海を嚴浄し、一切の衆生海を解脱し、善く能く諸法海を分別して、能く甚深に智慧海に入らん。(40)普く能く諸行海を清浄にし、一切諸願海を円満にし、親近して諸仏海を供養して、修行すること無倦にして劫海を経ん。(41)三世一切の諸如来、最勝なる菩提の諸行願、我れみな供養し、円満に修して、普賢行を以て菩提を悟らん。(42)一切如来、長子有り。彼の名号を、普賢尊と曰う。我れいま諸善根を廻向す。願くは諸智行、悉く彼に同ならんことを。(43)願くは身口意、恒しえに清浄にして、諸行刹土もまたまた然り。是の如く智慧あるを、普賢と号して、願くは我れ彼とともにみな同等ならん。(44)我れ遍浄なる普賢行を為し、文殊師利の諸大願、彼の事業を満じて、尽く余すこと無く、未来際劫、恒しえに倦むこと無し。(45)我が修行する所は、量ること有ること無く、無量の諸功德を獲得す。無量の諸行中に安住して、一切の神通力に了達せん。(46)文殊師利の勇猛智、普賢の慧行またまた然り。我れいま諸善根を廻向して、彼の一切に随い常に修学せん。(47)三世の諸仏が称歎する所、是の如き最勝なる諸大願、我れいま諸善根を廻向して、普賢の殊勝行を得ん為にせん。(48)願くは、我れ命終を欲せん時に臨んで、尽く一切の諸障礙を除き、彼の仏、阿弥陀に面見して、即ち安樂刹に往生することを得ん。(49)我れ既に彼の国に往生し已れば、現前に此の大願を成就して、一切円満して尽く余すこと無く、一切の衆生界を利樂せん。(50)彼の仏の衆会、咸く清浄にして、我れ時に勝蓮華に生じて、親しく如来の無量光に觀え、現前に我れに菩提の記を授けん。(51)彼の如来の授記を蒙り已って、無数に化身すること百俱胝にして、智力廣大にして十方に遍じ、普く一切の衆生界を利せん。(52)乃至、虚空世界尽き、衆生及び業煩惱尽き、是の如く一切無に尽くる時、我が願いも究竟して、恒しえに無に尽きん。(53)十方のあらゆる無辺の刹に、衆宝を莊嚴して如来に供え、最勝なる安樂は天人に施され、一切の刹微塵劫を経ん。(54)若し人、此の勝願王に於て、一たび耳に経れば、能く信を生じ、勝菩提心を求めて渴仰せば、勝功德を獲て彼に過ぎん。(55)即ち常に悪知識を遠離し、永く一切の諸惡道を離れて、速やかに如来の無量光に見えて、此の普賢の最勝願を具えん。(56)此の人、善く勝壽命を得て、此の人、善く人中に來たりて生じ、此の人、久しからずして、当に彼の普賢菩薩の如く行を成就すべし。(57)往昔よりの智慧無き力に由りて、造る所の極悪なる五無間は、此の普賢大願王を誦すれば、一念速疾にみな銷滅せん。(58)族姓、種類及び容色、相好、智慧、咸く円満して、諸魔外道は擯むこと能わず、堪

うるに三界の応供する所と為る。(59) 速やかに菩提大樹王に詣で、坐し已て諸魔衆を降伏し、等正覺を成じ法輪を轉じて、普く一切の諸含識を利せん。(60) 若し人、此の普賢願を讀誦し、受持し及び演説せば、果報唯だ仏能く証知して、決定して勝菩提道を獲ん。(61) 若し人、此の普賢願を誦せば、我が説く少分の善根、一念に一切悉く皆円して、衆生の清淨願を成就せん。(62) 我が此の普賢の殊勝行、無辺の勝福なるをみな廻向せん。普く願くは沈溺の諸衆生、速やかに無量光仏の刹に往かんことを。

“Bhadracaryā-praṇidhāna-gāthāḥ (普賢菩薩行願讚)” translated in Chinese by Amoghavajra

Atsuo FUJITANI

Bhadracaryā-praṇidhāna-gāthāḥ consists of the 62 verses described about the ten vows that Samantabhadra (普賢菩薩) had preached for the completion of Sudhanakumāra's (善財童子) enlightenment. It is also called Samantabhadra's practice of the ten vows (or Fugengyo: 普賢行).

The translator of this Chinese edition, Amoghavajra (不空) was a disciple of Vajrabodhi (金剛智) who was the fifth successor of Mahāvairocana's Dharma. After Vajrabodhi died in 741, Amoghavajra voyaged to South India to gather the scriptures of Esoteric Buddhism such as Vajraśekhara-sūtra (金剛頂經). As he had been under the patronage of the Tang dynasty since 756, he could engage in translating many sutras at Daxingshan temple (大興善寺) in Chang'an (長安). This text of Bhadracaryā-praṇidhāna-gāthāḥ was to be brought from South India by him. Perhaps it is presumed to have been translated after 756.

We can find some characteristics of Fugengyo in the contents of this text. First of all, so-called Ichijin-hokkai-kan (一塵法界觀) is picked up as one of them. It is a sort of contemplation on feeling the universe as follows. There are innumerable Buddhas and Bodhisattvas within things like one fine particle. Moreover they are ubiquitous in the universe. This is also a cosmic view being unique to Hua-yen (華嚴) Buddhism.

Second of all, in this text it is persuaded Mahāyāna Buddhist training as a practice to enter into the truth of the universe (or Nyuhokkai: 入法界), that we conceive, worship and praise the myriad of Buddhas being ubiquitous in the universe. Here it is very important that the subject of worship and confession is not mere one but all Buddhas in the three worlds of the past, the present and the future. By possessing repentance for all the three worlds Buddhas, it is possible to eliminate and purify the disabilities of our own Karman (業). As already mentioned, this Ichijin-hokkai-kan contemplating that the three worlds Buddhas are ubiquitous in the universe is indispensable. It can be said the root of the Buddhist training for repentance (or Sangeyo: 懺悔行). This point is also an important feature of Mahāyāna Buddhism.

Third of all, after the death of the person who performed this Fugengyo, his wish to be reborn in the Pure Land of Amitābha Buddha (無量光仏) is stated in the text. The purpose for his rebirth is to obtain a proof (Vyākaraṇa: 授記), from Amida Buddha directly, that he can always become a Buddha in the future. This thought of Vyākaraṇa is peculiar to Mahāyāna Buddhism being found in Mahāyāna Sūtras such as Saddharma-puṇḍarīka sūtra (法華經) and Sukhāvātī-vyūha-sūtra (無量壽經). This text belonging to the last part of Avatamsaka Sūtra (華嚴經) is strongly influenced by Pure Land ideas such as the wish of the rebirth to Pure Land (願生淨土) and the acquisition of Vyākaraṇa (授記獲得). Therefore I think that the relation with Pure Land Buddhism is very significant in considering the formation of this text.

Keywords: Fugengyo (普賢行) Ichijin-hokkai-kan (一塵法界觀) Nyuhokkai (入法界)

